
ドラゴンガールズ

桂 ヒナギク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴンガールズ

【Nコード】

N6916K

【作者名】

桂 ヒナギク

【あらすじ】

ある日、俺は傷ついた少女を見つけた。その少女はこの世の者ではなかった。彼女は異世界からやってきたといい……これは、異世界から来た竜^{バトルストーリー}ドラゴンに変身する少女と普通の少年の戦闘物語である。

1. 出会い（前書き）

携帯ゲームサイト「モバゲー」に投稿した小説。多くの方に読んで
もらおうと思い移植を決意しました。更新は不定期です。

1. 出会い

学校が終わり、家路を急いでいると、傷ついた一人の少女が道端に倒れていた。

関わるのは面倒だと思った俺は、そのまま素通りし……ようとしたが、「人が倒れてるのに無視しないでよ」と引き止められてしまった。

仕方がないので事情だけでも聞いておく。

「どうしたんだ？」

「白虎びゃっしに襲われたの」

「白虎って細長い体で白い虎の形をしていて西方を守護している中国の伝説上の神獣のことか？」

「伝説のことは分からないけどその通りよ」

「へっ、そんな神獣がこの世に居るわけなえだろ」

「居るわよ」

「じゃあ証明しろよ」

少女は覚束無い足取りで立ち上がった。

「驚かないでよ」

目の前の赤く長い髪で端正な顔立ちの少女は光に包まれ、形が変わり始めた。

お尻に尾と背中に大きな翼が生えると身体は巨大化し、光が消えるとそこには少女の姿はなく、代わりに全長五十メートルほどの紅白のドラゴンが立っていた。その見た目は、以前テレ東系列で放送されていたバーチャル世界を舞台に竜同士で戦うアニメの主人公のパートナーに似ていた。

「怪獣だ——っ！」

慌てて逃げ出そうとする俺を右手に掴み取るドラゴン。

こいつ俺を食う気か！？ 助けてくれウルトラマン！

「見ての通り、私はドラゴンよ」

「た、食べないよな？」

「今はお腹空いてないから食べないわよ」

つまり空腹なら食われていた、ということだろうか。

「と、取り敢えず降ろしてくれないか」

ドラゴンが俺を足下に置くと、少女の姿に戻った。

「あんた何なんだ？ ドラゴンが実在するなんて……」

「私はイヴァリースという世界から来たの。そこにはこの世界には存在しない生物が沢山住んでいるわ。でも……」

少女の話では、その世界は他種族同士の領地争いにより壊滅してしまっただけという。そのため、彼女は这个世界に逃げてきたのだ。そして今、这个世界を悪者が狙っているということも告げた。

「そんなこと言われてもな」

「異世界が存在するなんて信じられないよね。でも本当のことなの」

「それは兎も角、うちへ来ないか。行く宛て無いんだろ？」

「でも迷惑なんじゃ？」

「構わねえって」

「じゃあ甘えようかな」

俺は少女を連れて自宅に向かう。

「俺は育島いくしま 健たける。あんたは？」

「エルザ。エルザ・ティル・アレクサンドロス」

「強そうな名前だな」

「イヴァリースでは私が世界を治めていたのよ」

「へえ、じゃあ王族なんだ」

「この世界のトップは？」

「そんなのは居ない。けど、強いて言うならこの国の政權は鳥山とりやま久仁夫が握ってる」

「じゃあ挨拶に行かなきゃ」

「無理だ。会えない。国会へ入ろうとも警官が入れてくれないよ」

「国会？ 警官？」

初めて聞く単語のようだ。

「国会とは、衆議院と参議院の両議院で構成され、主権者である全国民を代表する議員で組織された日本国憲法の定める国の議会。国権の最高機関で、国の唯一の立法機関のことだ。警官というのは、犯罪を未然に防いだり罪人を捕まえる立場にある職員の集まりだ」

「成る程。ぜんぜん分からない」

俺はズルッと転けた。

「あんたの世界じゃ悪いことをした奴は誰が捕まえてんだ？」

「私の世界ではそういう輩は如何なる理由であろうとその場で抹殺だったわ。この……ニホン？　ここでは違うの？」

「当たり前だ。罪人全てが死刑になるわけじゃない。北朝鮮は容赦なく殺すけどな」

そう言い終えると同時に家の前に到着した。

「ただいま」

扉を開けて中に入る。

「お帰り」

母が出迎えてくれた。

「その子は？　傷だらけだけど」

「ああ、道端に倒れてて行く宛てが無いから連れてきた」

エルザは母に頭を下げた。

「初めまして、エルザ・ティル・アレクサンドロスです」

「外人さん？」

「いえ、異世界から来ました」

……………。

暫し沈黙。だが母が破った。

「面白い子ね。気に入ったわ。いつまでもうちに居てちょうだいね」

「有り難う御座います」

「健、お母さんこれから買い物へ出掛けるからよろしくね」

「ああ」

母はそう言って外へ出掛けた。

俺はエルザを連れて二階へ上がり自分の部屋に入った。

ゴミが散乱していた。

「汚い部屋ね。片付けたら？」

「片付けるのが苦手なんだ」

それにしても可愛いなエルザ。

「どうしたの？」

俺がエルザの美貌に見とれていると、彼女が疑問符を浮かべて首を傾げた。

「いや、エルザが可愛いから見とれていたんだ」
頬を赤らめるエルザ。

「そう言われたの初めてよ。有り難う」

もしエルザが俺の彼女になってくれたら……。

「なあ、エルザ」

「何？」

「俺と結婚を前提に付き合わないか？」

「……何の冗談？」

笑顔で訊ねるエルザ。嫌なのか。けどここで引き下がる俺ではない。

「本気なんだエルザ。俺はエルザが欲しい」

「……………」

黙り込み真剣な表情で考え込むエルザ。

「下衆な生物に求められるなんて不服ね……」

「エルザ！」

俺は不意にエルザの唇を奪った。

「……！？」

慌てて突き飛ばすエルザ。

「バカ！ そんなことしたら……！」

俺の体から伸びた光の紐がエルザの中に入っていた。

「何？」

「契約の証」

「はあ？」

「今から貴方は私のミディアムよ」

「ミディアム……？」

「ミディアムになったからには、貴方は私と運命を共にしなくてはならない。この先、辛いことが必ず訪れるわ」

それから——と続けるエルザ。

「ミディアムは契約を交わした者には絶対なの。つまり、貴方は私に忠誠を誓わなくてはならないわ」

「それは嫌だ」

そう答えた瞬間、俺の体は炎に包まれた。

「ぎゃああああ！ 死ぬ——っ！」

「私の言うこと聞く？」

「聞く！」

心の底から思うと炎は治まった。

「じゃあ早速だけど、部屋を片付けなさい」

「ええ？」

嫌な顔を見ると再び炎に包まれた。

「やります！」

俺は慌てて部屋の片付けを始めた。すると炎は治まった。

最悪なことになったぞ。俺はエルザの召し使いになっちまったのか。

俺はこの先いったいどうなるんだ——っ！？

1. 出会い（後書き）

エルザという名はフェアリーテイルのエルザから取りました。
ドラゴンの容姿はドラドラのセンコークーラですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6916k/>

ドラゴンガールズ

2010年10月9日08時23分発行